

E・ニーキツシユの「抵抗思想」について

— そのナシヨナル・ボルシェヴィズムとはなにか —

古 田 雅 雄

目次

はじめに

1. 「第三の位置」の源流であるナシヨナル・ボルシェヴィズムとはなにか
2. ナシヨナリズムを賛美する社会主義者
3. ソ連への様々な立場からの接近
4. ニーキツシユの時代認識と思想形成
5. ナシヨナリストとしてのニーキツシユ
6. 社会主義者としてのニーキツシユ
7. ニーキツシユの時代への「抵抗」
むすび

はじめに

E・ユンガーは、一九三〇年に発表した『総動員 (Totale Mobilmachung)』において自由主義文明に置き換えら

れる見解を発表した。国家が全資源を最大限に活用するのは、軍事力とその効率的運用をひとつに焦点化し有効に産業を発展させることを目的とするためである。戦争はその「巨大な作業過程」の典型であり、そのためには労働はより戦争状態のようになる。実際にその最初の実例が第一次世界大戦であり、その後の一九二九年大恐慌への対応策が今後の国家形態を証明しようとし、同時代のソビエト連邦共和国の動員体制においても成立した [Gleason, 1995: 25-26]。

ナシヨナリズムとコミユニズムが「同居」すると述べれば違和感を覚えるむきがあるかもしれない。ところが、例えば、現在、ヨーロッパ統合というグローバル化現象に反対するのは極右勢力だけではない。現在の西ヨーロッパの共産党はヨーロッパ連合 (EU) に懐疑的で自国の利益を擁護しようとしている。いわば左右両極の立場が異口同音に「統合」に反対論を唱えている。実際には、ナシヨナリズムと共産主義・社会主義は「水と油」の時代はすでに第一次世界大戦前後から終了している。ソ連ではレーニン没後、スターリン時代の「一国社会主義」を取り上げるまでもなく、一九四九年革命後の中国共産党の愛国的な共産主義を指摘するだけで、「両者が融合・妥協・和解・調整したものになったのか、「呉越同舟」という戦術方策であるか、を問わないとしても、今の両勢力をナシヨナリズムと社会主義が共存する現実と思想に矛盾を感じても、並存、協調していることも感じるだろう。

以上のようなことはいつから、どのような形で始まったのだろうか。一九一七年レーニンとトロツキーのロシア革命、一九三三年ルーズベルト大統領によるニューディール政策、同年ヒトラー政権誕生後のナチス体制のような社会主義の変種 (variant) が次々と導入された。すなわち、ソ連のボルシェヴィズム、アメリカのニューディール政策、ドイツの国民社会主義である。国家が社会に積極的に介入する時代を迎えたのである [Sutton, 2010: preface]。

本論では、その事情を「左翼がかった右翼人（または右翼がかった左翼人）」の中のひとりの人物を取りあげて

論評しておきたい。その人物はエルンスト・ニーキッシュ (Ernst Niekißch: 1889-1969)* である。彼はドイツの社会主義者としてヴァイマル共和国を糾弾し、かつナシヨナリストとして国民社会主義労働者党 (NSDAP) に徹底的に抵抗した「ナシヨナル・ボシユヴィキ (National Bolschvik)」であった。彼とユンガーがドイツでこの言葉や全体国家を初めて使用し出した。彼のヴァイマル共和国時代での思想形成とその抵抗活動をヴァイマル共和国からナチス政権初期に至るまでの足跡をたどっておきたい [Buchheim, 1957: 334-361; Lebovics, 1969: 139-156; Halfer, 2008: 283-298]。それとは別に、近年、西ヨーロッパ各国において、反ナチスや反ファシズムにいた人々のレジスタンスを単純に「善」と見なしてよいのかという、レジスタンス運動への再評価・再検討がある。それはその時代を賑わす左翼・自由主義的陣営の人々の活躍だけでなく、ナチスやファシズムとの競争相手であった保守主義者の反ナチスや反ファシズムのそれぞれの運動のあり方の一例としても小論でも紹介しておきたい [vgl. Rätzsch-Langejürgen, 2000]。

1. 「第三の位置」の源流であるナシヨナル・ボルシエヴィズムとはなにか

ナシヨナル・ボルシエヴィズム (Nationalbolschewismus) は戦間期にドイツで使用された政治用語である。ナシヨナリズムとボルシエヴィズムとを融合させた政治思想であり、保守革命の一形態である。エスノセントリズム (ethnocentrism) と反資本主義の両思想が奇妙な融合をし、現在の「第三の位置 (Third Position)」的潮流の淵源である、とされることがある。

その実践内容は、ヴェルサイユ条約と西側戦勝国に対するドイツのナシヨナリストによる抵抗の思想・政策を説明する。ドイツはボルシエヴィキのロシア、つまりソ連との同盟と共同して共通の敵である西側諸国に対抗する考え方である。この考え方の発端は、一九一九年K・ラデックにあった。もともと、この提唱は二つの左右の陣営に

自己流に解釈した。ひとつは右翼陣営の極右ナシヨナリストである（例…O・シュペングラ、E・v・レヴェントロウ伯、メラール・ヴァン・ブルックなど）。もうひとつは左翼陣営（例…ニーキツシュ）に属するが、共産党や社会民主党に批判的な人々である。歴史的な結果からさきに述べれば、彼らはナチスの政権奪取を阻止できなかった [Bullcock, 1977: 408-409]。

もつとも、ナシヨナル・ボルシェヴィズムは過去の時代状況において成立した思想だけとはいえない。それに相当する、近年の用語として「第三の位置」が考えられる。「第三の位置」は通常、資本主義と共産主義の両方に反対する政治思想である。それぞれの立場があるとしてもその多くは革命的なナシヨナリズムの要素を強く有する。その代表例には、歴史的にはファシズム、ナチズム、ナシヨナル・ボルシェヴィズム、最近ではネオ・ファシズムなどがある。「第三の位置」の提唱者は自己の位置づけを左翼と右翼の中間でなく、両者を超越することを目標とする。生産手段の所有を国民・民族に分配しようとする思想である。いわばナシヨナル・ボルシェヴィズムは「第三の位置」の源流のひとつとなっている。近年では、ヨーロッパ議会議員のR・フィオルは、「第三の道」の中心的な提唱者として、ネオ・ファシズムをこの思想で体系化・理論化しようと試みた。一九九二年にロシアではA・ドゥギンとE・リモノフがこの思想に基づいた国家ポリシエヴィキ党を創設した。この党はプーチン政権打倒を目指している。この思想の信奉者はウクライナ、ベラルーシ、イスラエルにも存在すると言われている。現在、横断戦線（クロスフロントQuerfront）がシオニズムやグローバル化への反対・平和運動の形でその考え方を受け継いでいる、と言われる。

ヴァイマル時代に戻そう。ユンガーとニーキツシュは両翼の立場から直接行動によって、ドイツ人民を拘束する国内では資本主義、国外ではヴェルサイユ体制のそれぞれを打破することを論じた。その後、第三帝国時代初期に

はG・シュトラッサー、O・シュトラッサー兄弟などのナチス左派にも影響した。ナチス政権の成立で、この思想は中斷を余儀なくされた。ヴァイマル時代には、共和国政権に対する保守側と極左側の共闘（あるいは分裂・対立）から様々なナショナル・ボルシユヴィズムが成立し、これが現在の「第三の位置」の原型になった。

ドイツ社会民主党から転向して「第三の位置」の指導者となったニーキッシュは、極右主義者と極左主義者の共闘による直接行動で資本主義の打倒を主張した。これが彼のナショナル・ボルシェヴィズムを規定した。彼はこの思想への支持を求めてナチス左派、それに軍幹部、後の首相となるK・v・シュライヒャーにも一時期その動きを政権内に取り込ませるために接近するが、一九三四年「長いナイフの夜」で主要指導者が粛清され、その運動は失敗した。

2. ナショナルリズムを賛美する社会主義者

第一次世界大戦勃発まで、労働者階級の国際的連帯はドイツの社会主義運動の理念であり続けた [Heidegger, 1956]。ドイツ、フランス、イギリスの議会において、社会主義者が自国政府の提出した戦時国債に賛成票を投じたことなど、第二インターの連帯は崩壊した。「ナショナルリズムは最も圧政に苦しむ人民の間にあって、人工的なシンパシーをもつネイションとして強力な存在であることを証明したのである」(W・ゾンバルト)。

一九一九年ヴェルサイユ条約で戦勝国によるドイツ国民への民族的な屈辱が開始される。当時ドイツ国内のヴァイマル連合政権の中心的存在であった社会民主党(SPD)は自分たちの階級内と、自分たちの陣営に取り込みた中間層のもつナショナルリスト感情を考慮しなければならなかった [cEvans, 2004]¹⁾。そのことはナショナルリズムというイデオロギーを社会主義者にどのように受容させるかという難題を投げかけた。それに対して、ドイツ共産党

は、自党への支持拡大を狙って（もちろんモスクワからの指令によるが）、ナシヨナリスト感情を積極的に活用しようとしたことがある。その共産党のナシヨナリズムへの対応は、中間層の若者と新たに中間層に参入した一部を獲得できるとする楽観的な戦術でしかなかった。これは戦術レベルのソ連への接近姿勢が、原理的に反西ヨーロッパ的でもなく、軍部、外交界、資本家にもあった。このような親ソ路線はブルジョア的なナシヨナル・ボルシェヴィズムと呼ばれる。しかし、別のもうひとつの流れがあった。ドイツ共産党とコミンテルン内部にあったナシヨナル・コミユニズムの動きである。ナシヨナル・ボルシェヴィキのすべては「東方志向（ソ連との調停政策）」の支持者である。この名称で一括りで称せられる人々は、第一次世界大戦の敗戦国と、帝国主義の犠牲者を「西ヨーロッパ諸国の支配から解放」という同盟意識があった〔Stein, 1961: 396；脇、一九七六：一四五・一四六〕。

ところが後者に位置しながら、ニーキツシュは、ナシヨナリズムの価値とドイツ左翼主義の価値の和解に期待した左翼急進主義者では例外的な人物であった。つまり、ドイツ国民を国内外からの搾取者に対する抵抗を組織しようとしたのである。

一九二〇年代、一九三〇年代、極右主義と極左主義の主張者にあつて、社会保守主義者の代表者が資本主義と社会主義の間の中道路線 (middle way) を提示し行動したことがある。それは社会保守主義のプロパガンダにそのレトリックとその教義を借用することで自己を正当化しようとしたのである。

その代表的人物は二人いる。ひとりは一九世紀の反動主義者であるO・シュベングレーである。もうひとりが本論で紹介するマルクス主義者であったニーキツシュである。両者は「社会保守主義者」として反ヴァイマル共和主義の立場と、その共和国時代に抵抗を試みようとした。しかし、そののち実際の行動でも思想においても、その「予言者」になることはなかった。両者とも「社会保守主義」という装飾を施し、その実践に移そうとした。とり

わけ、ニーキッシュの思想と行動では、自己の見解の本質とその行動との間の区別が不明瞭で未完成の形で終わってしまった。

シュペングラーは戦前の第二帝政社会に最も感傷的、知的に共感した人物である。それに対してニーキッシュは帝政時代に敵意をもって回顧したのである。しかし、両者とも、ヴァイマル共和国時代において、当時としてはナシヨナリズムと社会主義という異なるイデオロギーの和解を図ることで、ヴァイマル体制を批判的に捉えていた。

シュペングラーは、保守主義者として、第一次世界大戦前のドイツの過去からの拘束を解放することを目指したが、そのことが結果的にはナチズムに極めて近い立場をとることになった。他方、ニーキッシュは、社会主義者として、ブルジョア社会を糾弾し、その打倒を目指そうとした。結果的にはシュペングラーと異なり、ヒトラーに激しく抵抗したのである。両者とも自己流の立場から、敗戦国ドイツ国内の様々な闘争と戦勝国からの政治的、経済的な抑圧からの解放に向けてドイツ国民を動員しようと試みたのである。

ニーキッシュの「抵抗思想」は三つの淵源がある [Vgl. Niekisch, 1965]。

- 一、彼は、マルクス主義者として、ヴァイマル体制とヴェルサイユ体制に抵抗を示す決意があることである。
- 二、ドイツ革命の結果として、外交関係においてソ連型全体主義社会を模倣することとそれと協調を目指す「東方志向 (eastern orientation)」を目指す理由があることである。
- 三、敗戦と賠償は彼がもつドイツ・ナシヨナリズムと、彼にとつて不条理なことへの抗議を含めたミリタントな行動を活性化させることである。

ヴァイマル共和国時代には、この三つの、別々に意味ある考え方はナシヨナルな「抵抗思想」に結実し、三つの淵源を分かちがたい思想として結合させ、ある面では奇妙な融合が図られた形で表現されることになる。ニーキッ

シユの「抵抗思想」は共和国末期のナチス政権前夜には結果的には活かされることはなかった。その原因は彼の思想に社会保守主義的要素を導入することへのこだわりが原因があったかもしれない。それが限界であったとも言える。

3. ソ連への様々な立場からの接近

一九一九年保守主義者P・エルツバハ―は、ドイツはボルシユヴィズムのほうで西洋列強諸国の「奴隷化(enslavement)」するよりも望ましいという主旨の冊子を発行したことがある。外交での東方志向は一九世紀以来の北ドイツ保守主義者の「夢と願望」であったとしても、レーニンの連合国への嫌悪はヴェルサイユ平和会議でのドイツ代表であるブロックドルフ・ランツォイ伯のような愛国主義者にうまく利用された。彼はソ連をドイツとは別のアウトサイダー国家と見なす。ドイツが戦勝国への外交手段を失ったので、それを再獲得するためにも、ドイツがソ連に接近することで外交上の不利さを補う条件に活用しようと企図した。これはシュトレゼマン政府が西側戦勝国と敗戦国ソ連の間を行き来する、いわゆる「ブランコ外交」と同じ発想である。独ソ関係の改善は一九一九年ドイツ軍のヒンツ將軍とパウアー大尉が当時ドイツに収監中のソ連共産党の代表のひとりであるラデック(ブルガリア共産党)への訪問がその証拠であり、ドイツはソ連に門戸を開放することからドイツの国際政治での有益さを感じていた [cf. Levovics, 1969: 140-150]。

左翼の人々では、H・ラウフォイベルクとF・ヴォルフヘイムという共産主義者が一九一九年一月に「革命的政党間の休戦協定」を弁護したことがあった。前年末から年始にかけて共産主義者がドイツ軍や義勇軍からの弾圧を受けた中にもかかわらず、彼らはヴェルサイユ体制側の戦勝国を憎悪するナシヨナリストである旧タイプの軍隊

をプロレタリア軍に切り替えるために、帝政時代の軍人に指導されるドイツ赤軍を創設しようとした。自分たちの側の兵士は「統一した人民」の名において反資本主義感情に動機づけようとした。それには西側諸国との対立において、ソ連がドイツの立場を支援してくれることが不可欠であった。国内の階級闘争は外交政策に影響をもたらすであろう。しかしこの時、レーニンはこの思惑をマルクス主義者の「小児病」として、ナショナルな共産主義の教義と性格づけを批判し、ドイツ共産党指導者はそれを受諾し、結果、ソ連の方針によって当初の構想が「逸脱」していたと宣言しなければならなかった。

だが、この「逸脱」は一九二三年のルール危機での新たな党戦術として採用されることになった。つまり、共産党は新しい支持者を獲得するために、フランス軍に抵抗し処刑された若者を賛美することで、国民のナシヨナリズムを利用しようとしたのである。保守主義的なナシヨナリストであるE・v・レヴェントロウ伯でさえが『赤旗』にその英雄的行動を賛美する記事を寄稿することを依頼されたのである。その企図は明らかに共産党が国民からの支持を得ようとする戦術でしかなかった。^③

4. ニーキッシュの時代認識と思想形成

この事件から、ニーキッシュは戦後五年フランスのドイツへの集中的な敵意と弱体化に衝撃をうけ、それは敗戦国への「裏切り」と感じた。そこで、彼は自己の政治原理を再検討しなければならないと自覚する。だから、この段階では、彼はまだ社会にむかつてドーズ案^④や国際連盟加盟への批判を表明していない。彼が自ら革命的な「抵抗」と称する思想に本格的に取り込み、自らの組織の設立に着手するのはその二年後のことである。もちろん、彼自身はドイツの無能力を信用しなかったし、認めたくなかったのである。一九二四年に「ドイツ人は自らの未来を裏

切っている」と述べる。もしドイツ人が革命的な人民であることに留まるなら、情熱と粘り強い意思をもって、現在の国際的な権力関係を転覆するために行動を起こすことを決意する [Schüddekopf, 1972]。

一九二五年ロカルノ協定が成立した。それはヨーロッパの新たな時代の和解を示すかに見えそうであった。G・シュトラーゼマン外相はヴェルサイユ条約に規定された賠償債務でのドイツの「履行政策」を果たそうとするのであった。ドイツ、フランス、イギリス、イタリアの代表による同協定は、シュトラーゼマンがヴェルサイユ条約での西ヨーロッパ各国の領土安定をドイツに保障したものと理解し、一連の領土不可侵と調停合意に署名した。シュトラーゼマンは、これとの交換条件として、ラインラントを占領する戦勝国軍隊の早期撤収を連合国側が受諾することを目論んだのである。超国家間による「ヨーロッパの安定」を実現するために愛国的なドイツ外相の考えから提示され、交渉の良好な結果がもたらされた。⁽⁵⁾

ニーキツシュが激しく自説を展開し発言するのは、この国際的安定の回復の瞬間が成立したとされたとき以降からである。一九二四年以降、ニーキツシュは「ホフガイスマー・サークル」に集う若い社会主義者と活動をとともにするようになる。このサークルの人々は、社会主義とナショナリズムを分け隔てる垣根を取り除くようになる。若い社会主義者は穏健な一九二五年社民党の「ハイデルベルク綱領」に批判的であった。彼らは一八九一年「エルフルト綱領」にあるナショナルな価値（観）への関与に不満をもっており、「ハイデルベルク綱領」にもその点で失望したのである。もともと、その時点では、ニーキツシュ自身ははっきりした立場を示さなかった。彼の「一匹狼的なナショナリズムは社民党には当惑材料であったし、またレヴェントロウ伯との接触は党内において疑惑を呼び、さらに彼の党内の立場を悪化させるのである。彼は、当時ザクセンが共産化した際に、社民党、民主党 (DDP)、民族人民党 (DNVP) による連合政権案を提出したが、それによって一九二六年に社民党から除名される。同時に、

「若き社会主義者」のナショナルなリーダーシップからも排除され、その後社民党はその組織自体を解散させてしまった [vgl. Niekißch, 1965]。

ニーキッシュは、一九二六年「ホフガイスマー・サークル」の最終回状において、ロカルノ体制・時代の精神、哲学、政治への攻撃に着手し、ロカルノ協定に参加したドイツの交渉を東側世界、つまりソ連への裏切りと酷評した。いわく、ヨーロッパの安定はドイツに不利益をもたらすばかりか、かえってヨーロッパ政治を不安定・複雑化することになると論じ、だからその状況によってドイツは大国の地位への回復をもたらす余地を見出さなければならないことを期待する、と主張した [Schüddekopf, 1970]。ニーキッシュはロカルノ条約をドイツ国民の利益に反する「犯罪」と見なしたので、ドイツが外交的な一撃を加えることで、ロカルノ体制を中断させ、ドイツの地位を回復する方途を示そうとする。

その後もニーキッシュはロカルノ体制について相変わらず批判を続けていた [Niekißch, 1965: 130ff]。彼によれば、シュトレーゼマン外相はヴェルサイユ条約を再承認しエスザス・ロートリンゲン（アルザス・ロレーヌ）などの放棄によってドイツをさらに弱体化させている、と断罪した。彼に言わせれば、シュトレーゼマンはドイツにとっての西側諸国の抑圧者の「友情や恩恵」にすぎりその見返りを求めようとしたが、ドイツ国民の死活的な国益を裏切ったのである。その結果、彼はヴェルサイユ条約を押し付けた強国の論理に対抗できる急進的かつナショナルな「抵抗思想」を宣伝する活動に従事しなければならぬと感じたのである。

一九二六年七月ニーキッシュは自らの定期刊行物を発刊した。それが『抵抗：社会主義・民族主義革命政治雑誌 (Der Widerstand: Blätter für sozialistische und nationalrevolutionäre Politik)』である。ニーキッシュは「ナショナルな立場からの反対」と名づける思想に読者の行動を駆り立てることを期待した。彼の自説を雑誌の前書きで述べてい

る。

「ドイツ国民が革命的人民として行動するか、無気力に抑圧され、自由のある地位から排除されるか」。彼は第一に自国の連合国からの桎梏を取り除き、第二にドイツ労働者の解放を目指すことにある。社会的抑圧の解除、これがなくならない限り、ドイツの「奴隷状態」からの解放はありえない、と論じた [Buchheim, 1957]。

ところが、一九二六年ごろまでにニーキツシュは自らが孤立無援状態にいると理解するようになる。そのことは彼のナシヨナリストとしての最初の著述とそれに関連した人々との接触によって、さきに記したように社民党から除名処分を受けたことに表れていた。まだこの段階では、彼は自らのナシヨナリストとしての活動による成果を達成させることはなかった。彼が想定する行動単位は定期刊行物『抵抗』を執筆する「舞台」だけであり、そこに集う「ナシヨナリストの少数派エリート集団を結成することである。ここで、ニーキツシュ自身が初めて民族至上主義者 (Völkische) と共産主義者 (Kommunist) の同盟を画策する思想を編み出したのである。

5. ナシヨナリストとしてのニーキツシュ

ニーキツシュのボルシェヴィズムは、ドイツのナシヨナルな解放を煽動するために西側諸国のソ連拒否への対抗上の戦術・レトリックとは単純に見なせない思想であった。そして、その思想はイタリアのムッソリーニが国家主義と主張するものではなかった。ナチズムもファシズムもある種の社会主義的政策を採用したとしても、民族・国家と社会主義のどちらにウェイトをかけたかを考えれば、当然その回答が得られる。もちろん、ボルシェヴィズムも国家万能であることにも留意する必要がある。

ニーキツシュはファシズムとボルシェヴィズムの両方を社会的でナシヨナルであるものと論じていた。その相違

は次の点にある。

第一にボルシェヴィズムは社会問題の解決から出発し、そして実質的に人民からの真の評価に耐えうるところまで到達する。第二にファシズムは第一とは逆の順番に従うイデオロギーである [Niekisch, 1968]。一九二六年彼は「労働者とドイツの未来」に関する論評を編纂するため、ナシヨナリストのレヴェントロウ伯を説得し、彼にドイツ労働者のための自由な改革への共感を示した「他の陣営から」と題するコラムを寄稿させた。⁶⁾

ニーキッシュへの批判者は一九二六年から一九二七年にかけて目立って存在しなかった。一九二八年夏、彼は活動を拡大するためにドレスデンを去り、ベルリンで定期刊行物を出版し続けることを決意し抵抗出版社を設立した。⁷⁾ベルリンでは、「ナシヨナル・マイノリティ」サークルを組織化する。彼は一九二九年と一九三〇年にいくつかの著書を執筆する中で、また『抵抗』において、彼の論じる「抵抗思想」を精緻化している。その作業を通じて、ニーキッシュの「抵抗思想」は「ナシヨナル・マイノリティ」サークルで容認され始めたのである。

ニーキッシュのナシヨナリズムに基づく解放に関する思想は、彼の社会主義観によっていつそう条件づけられてくる。ドイツ政府は、フランスとベルギーの両軍がルールに侵攻した際、ドイツ人は自らの財政の破壊を強いる消極的抵抗を行使させた。ニーキッシュは、大企業が抵抗費用を支払う代わりに、大企業の道具と化した、と当時のクーン政府を告発するのである。彼に言わせれば、ドイツ政府が費用を捻出させることを国民に強いたのである。その国益の多くは略奪された中間層、裏切られた労働者階級のものである。最終的に彼らは抵抗の負担を支払わなければならぬ人々である。それに対して、大産業者と金融資本ブルジョアジーは財を増す一方にあり、市民への責任 (Staatsbürgersinn) を果たさずにいる [Niekisch, 1968]。

ヴェルサイユ条約、賠償、ルール占領、ドーズ案、ヤング案のすべては、ニーキッシュから見れば、ドイツ国民

を西側列強国の「奴隸」にしている証拠にすぎないのではないか。ドイツの敵がドイツに服従を強いる手段は、西側列強国と国際資本の私的所有（制）の概念である。例えば、ドーズ案の転換は商業上の負債を政治的負債に置き換えただけであり、それはドイツの賠償の受取国に対して債務国のドイツだけに一方的に課せられたものでしかなかったのではないか。これはニーキツシュのナシヨナリストとしての誇りを踏みにじる行為であった。したがって、ドイツの賠償支払意思のないことを条約の破棄で示すべきであった。

ドイツ国民はブルジョアジーでなくプロレタリアートである。ニーキツシュは、ドイツ人が非ドイツ的な私的所有（制）への崇拜を拒絶しようとするなら、そのことは国内外から解放の目標とする反撃を開始すべきである、と主張した。ニーキツシュの政策実施論によれば、私的所有（制）の自己解消は資本主義とヴェルサイユ秩序を同時に拒否することである。この目的のためには、ドイツ労働者は「国家の兵士」にならなければならない。「兵士」には義務・規律・自己服従・忠誠・奉仕と犠牲への意思が美德とするのは不可欠である。これらの要素はプロイセン流のナシヨナリズムを表明することである [Niekisch, 1968]。

保守主義的なナシヨナリストとしてのニーキツシュの経済思想は、革命的な社会主義者のそれと区別できず、「プロレタリア的ナシヨナリズム」を主張するシュペングラのプロイセン流社会主義と類似する。

6. 社会主義者としてのニーキツシュ

ニーキツシュのプロレタリア的ナシヨナリズムは歴史的正当性を証明することを試みながら、マルクス主義と自由主義のインターナシヨナリズムを許容しないことも要する。プロレタリア的ナシヨナリズムにとって、「人間性」「国際化」のような要素はドイツ精神性のためにドイツ国民に不必要である、と考える。そうでなければ、彼はだ

れの利益になるのかと問うている。ドイツが現状を追認するだけだと、ドイツ国民が西側諸国の抑圧者にだけ奉仕することになる、と彼は結論づける。ニーキッシュは、国家という共通問題を統括するブルジョアの委員会ではなく、社会主義者がナショナルな価値（観）に敵意を抱かずに、ナショナルリズムを政治的に中立的、不可欠な構造であることを社会主義者がナショナルリストを説得するである〔Niekisch, 1968〕。

第一に、ニーキッシュの社会主義者としての視点である。彼はF・ラサールを「ナショナルな社会主義者」として評価する。ラサールは新しい国家の指導権を得る目的でナショナルな統一のための運動の前衛に労働者を位置づける努力を試みた。社会主義がラサール主義的なコースで成果をどのように相違でもたらせるのか。⁷

ニーキッシュはナショナルリストの利益のためにビスマルクを引用する。ビスマルクはドイツ人に自由主義的「夜警国家」を方向づけなかった政治家である。ある意味で、ビスマルクは階級利益を超越した「純粹な国家」を創造しようと考えられる。それは国内政策から外交政策に至るまでである。ニーキッシュは、ビスマルクがドイツ帝国を創設する際のマキャベリズムの手腕を高く評価する。ドイツの外交政策の目的は軍事上の安全保障と利益とが結びついておらなければならない。⁸ だから、理想主義的な倫理（観）で一国の外交政策は妨げられるべきではない〔Niekisch, 1958; Niekisch, 1968〕。

第二に、ニーキッシュのナショナルリズムとは何であろうか。一言では、「ドイツ人はひとつのドイツの形と権力意思の時代にならなければならない」〔Haffner, 2001: 298〕。ドイツがヴェルサイユ条約に服従させられることで主権を制限され、国際連盟の一加盟国となつてその主導国に制約を受けるかぎり、彼の主張する外交目標を履行することは不可能であった。ドイツのナショナルリストとして、彼によれば、ドイツ人自身に「不忠誠の行為の罪」を強要されるよりも、むしろドイツは西側戦勝国が構築した世界像を粉砕すべき役割を担わなければならない。だから、

ドイツは自らの解放の外交政策目標を達成するためにも、ドイツ国民はある種のナショナルな姿勢を採用しなければならない。そのことでドイツは、かつてのプロイセンのような行動をとって権力国家 (Machstaat) に到達できうる。ところが現実では、ドイツ国民はプロイセン的な性格を喪失してしまった。ヴァイマル共和国は西側戦勝国のためだけの存在になっている。今やプロイセン的な考え方である「ポツダム思想」を速やかに再現しなければならぬ。

第三に、「ポツダム思想」は具体的にどういふものであろうか [Haffner: 2001]。それはドイツを悪化させた西側戦勝国の政治・経済・社会と対象的なシステムを設けるべきである。ドイツは西ヨーロッパに属することを拒否しなければならぬ。そしてもう一度、プロイセンの経験に起源をもつ思想を再現しなければならぬ。資本主義とヒトラーの国民社会主義への真の革命的敵対者は、異なった方法で知的遺産として残る。例えば、非妥協的なナシヨナリル・ボルシユヴィキとして、ニーキツシュは一九二六年雑誌『抵抗』を媒体にその運動を開始する。彼は「社会主義的革命的政策」からヴェルサイユ条約を資本主義と一体化したものとし、その対照として「プロイセン」を社会主義的存在と見なした。そして、共産主義国のソ連がヴァイマル共和国よりはるかにプロイセン・ドイツ的である、と主張した [Nietisch, 1958: 136; Nietisch, 1965: 167ff; Stern, 1961: 265]。

結局、「ポツダム思想」の具体化は全体国家 (Total state) の実現である。その中に経済、社会、文化は国家によってそれぞれの場所を割り当てられる。プロイセン・ドイツ人の政治倫理観の中核部分は、「ポツダム理念」と「ドイツの抗議」の形で、ニーキツシュの抵抗精神に宿っていることを理解しなければならぬ [Buchheim, 1958: 351]。さらに、ニーキツシュは、西側戦勝国の論理を批判するだけでなく、プロイセン的な論理で対抗しながら、「ポツダム思想」対「西側思想」を超越するテーマに取り掛かろうとするのである。彼の思考からすれば、全体主義体

制のソ連は「ポツダム思想」を実現した国家である。そこで、ドイツを再び「プロイセンの性格をもつ国家」とし、そしてポツダムとモスクワの間に「協商関係 (entente)」を支持するように労働者に呼びかけ、ソ連と同盟することで、ドイツを国内外の奴隷状態から解放できる。古いタイプの貴族的軍人の徳を称賛することで、一方ではナシヨナリストの理想主義を訴えながら、他方では反ブルジョアの立場でブルジョアの的な若者を魅了しようとした。長期的な計画はドイツ・ブルジョアジーの壊滅である。その意味では彼はマルクス主義的である。一時的にでもソ連とドイツの協力は、世界の牙城である西側諸国の植民地状態にあるドイツを「外敵からの解放」への目標に向かうことを可能とする。

それゆえ、一九二〇年代後半から一九三〇年代前半にかけて、ニーキッシュとユンガーは密接な関係にあったにもかかわらず、ユンガーはニーキッシュの反ブルジョアの態度を共有できなかった [Stuwe, 1973: 383, 389; 脇、一九七二・一四四]。

7. ニーキッシュの時代への「抵抗」

ニーキッシュの述べる「ポツダム思想」「抵抗思想」は、保守陣営の人々にもある程度共有する考え方であり、それほど目新しいものではない。ただ、ニーキッシュが論じる時代に対する形態の把握力と自らの方針への説得力は、新たな抵抗勢力を結集する作用を果たす可能性となる。仮に第一次世界大戦敗戦前にドイツが、一九一七年ブレスト・リトヴィスク条約において、ソ連との友好関係、さらに同盟にまでレベルアップできる機会を採用していたなら、戦後に独ソ両国は英仏などの西側戦勝国に対抗する共同戦線を張ることができていたかもしれない。これは結果論でしかない。ドイツが敗戦を迎えたゆえに編み出された外交戦略であったかもしれない。

では、ニーキツシュはソ連共産党をどのように見なしていたのであろうか。それはソ連共産党の概念と彼の解釈とは矛盾するというより異なっている。なぜなら、彼はソ連の共産主義が果たす役割が小さい、と考える。ソ連国民の大部分を占める農民にはそれを理解し果たすことは不可能だと見なした。ソ連はあくまでも「農民国家」である。共産主義思想はソ連国民への一種のレトリックでしかない。彼らの使用する「共産主義思想（ボルシェヴィズム）」はあくまでも農民から得られる忠誠心の源泉や標語にすぎないのである。むしろ、ナショナルな忠誠心の意味では、共産主義思想はロシアにあるナショナルリズムを表面上覆い隠す働きでしかすぎない。ニーキツシュにとつても共産主義をアピールするのは、その「非妥協的、反西側的、反戦勝国的、反ヴェルサイユ的行動」を喚起するためのプロバガンダでもあった。そのプロバガンダに仮に八〇〇〇万人のドイツ人が同意すれば、ヴェルサイユ的秩序を壊滅することが可能であったはずである。これはソ連にもドイツにも適用できるはずである〔Niekišch, 1958: Niekišch, 1965〕。

ニーキツシュは、この「抵抗思想」をもって、ドイツの国内外の「抵抗運動」を組織化しようとした。彼は、右翼陣営の人々を含めて、すべての政治陣営に訴える。だが、それは容易なことではなかった。彼の方針は、左翼陣営からは、共産主義者がナショナルリズムに共感するアウトサイダーとして取り扱われ、社民党からは除名処分を受けた人物であるという事実がある。それはニーキツシュの政治的影響力、とりわけ左翼陣営の中の限界を示すものであった。したがって、彼の唯一の人的・思想的支えとなる資源は、様々なナショナルリスト・グループとの接触する中でそれに属する人々だけであり、彼らとともに活動を行うだけしかなかった。彼はレヴェントロウ伯のような人種差別主義的なナショナルリスト、そしてユンガーに『抵抗』に寄稿の場を提供する努力をしかかなかった。⑤
また、そのような姿勢は八〇歳になったP・ヒンデンブルク大統領を賛美する記事を寄稿したことに表れている。

いわく「老いた兵士はドイツ人民の最良の犠牲的精神を具現化している」と述べる。また、M・エルツベルガーやW・ラーテナウを暗殺した極右テロリストを擁護した。西側諸国の要素や国際金融資本の「高利貸し支配 (Shylock grip)」がいかにドイツにとって危険であるかを論じたのである。あらゆる人々を結集することを謳ったとはいえ、社会主義とナシヨナリズムという左翼と右翼の入り混じった「抵抗思想」は右翼陣営の一部のみしか同意を得られなかったのである [Lebovics, 1969]。

一九二八年春にニーキッシュの活動の一部は成果を得たかもしれない。かつてバイエルン・レーテ共和国の指導者であったニーキッシュに敵対し、一九二三年ヒトラー一揆に加担した「オーバーラント団 (Band Oberland)」が、一九二一年から一九二五年までその組織の分裂と政治的志向の変更で解体寸前であった。一九二五年にそれが再建されると、彼らはナチスとの協力を拒否し、代わってナシヨナル・ボルシユヴィズム運動に参加するようになった [Schüddenkopf, 1960: 366; Waite, 1952]。

一九二八年ニーキッシュは「団」の集会に出席した。それ以後三年間、彼は彼らと協力関係を維持できた。一九二八年一月「団」リーダーは創刊した雑誌『指導者 (Führer)』を準備し、そのメンバーの何人かは『抵抗』編集に参加した。一九二九年ニーキッシュは、第三帝国初期にも活動する同志を集めたのである。それは「団」、ナチス突撃隊 (SA) の一部、ザクセンの社会主義者、若きドイツ団 (Jungdeutsche Orden) のそれぞれのメンバー約四〇〇〇人から構成された。ただ、この組織の積極的な活動家はその全体の八分の一程度でありすぐに分裂し、ニーキッシュは『抵抗』サークルに戻らざるをえなかった [Schüddenkopf, 1960: 368; Buchheim, 1957]。もともと、少数とはいえ、『抵抗』サークルの活動家は積極的な行動を展開した。

ニーキッシュは積極的に右翼グループと交わるようになった。ニーキッシュは軍將校団とは友好関係を保てた。ニー

キツシュは、彼らを前にドイツ外交政策の西側志向を攻撃する演説を行うこともあった。¹⁰⁾とはいえ、その人々とは、ボルシェヴィズムや社会革命の考え方では折り合いがつかうことはなかった。

ニーキツシュはシュレーズヴィヒ・ホルシュタインの急進的な農民に関わりをもつ。ナチス左派のO・シユトラッサー、共産主義者、その他のナシヨナリスト革命グループの代表たちが集会を設定した。農民リーダーC・ハイムを一九三二年大統領選挙候補にし、支持獲得を期待した。なぜなら、ハイムが立候補すると、ヒトラーから農一票を奪える目算があったからである。しかし、ニーキツシュは支持を得られず、最終的にその計画は失敗に帰した。結局、ヒトラーはシュレーズヴィヒ・ホルシュタインの農民票の大部分を獲得できたのである [Herbert, 1967: 130-133]。

ニーキツシュは、実際の政治舞台での活動では成果を取めたとは言いが難かったが、政治的綱領である「精神性」では重要な貢献をなしたことについては評価できる。イタリア・ファシズムからは国家主義の偉大さへの意思をもった運動を参考にした。ナチズムに対しては、ニーキツシュはあくまでもドイツ北部、つまりプロイセンを中心において、「外敵」への民族的抵抗を示すために、そして本来の社会保守主義からヒトラーの思想に反対し続ける。ヒトラーのそれは過去数百年中央ヨーロッパにおいて蓄積されてきた文明の遺産を破壊する思想の独りよがりの行為にすぎないからである [Pulzer, 1964: 330]。

ニーキツシュには、ヒトラーはあまりに南部的、カトリック的に見えたように、ナチスがどのように体質を変更しようとも、プロイセンとプロテスタンティズムの精神性が喪失する、と感じたのである。一九三〇年代になると、ニーキツシュの「抵抗思想」は次第に変化し、ヒトラーとナチズムへの抵抗に焦点を当てるようになった。今度は、ニーキツシュは社会主義者の立場からヒトラーを攻撃し始め、一九二六年から一九三一年にかけて、ナシヨナル・

ボルシェヴズムを思想根拠にナチスへの防波堤として使用したのである。ところが、ドイツのブルジョア社会は最後の期待としてヒトラーにドイツ国民を託そうとしている。ニーキッシュは、『抵抗』と新たな定期刊行物『決定(Entscheidung)』を通じてナチズム攻撃を執筆したのである。これはナチスが廃刊を命じるまで続いた。¹¹⁾

むすび

B・シヨイリヒは、ニーキッシュの死後出版された著書の前書き [Schewing, 1963: 7ff] において、ニーキッシュを第二帝政、ヴァイマル共和国、第三帝国、そして第二次世界大戦後の分断ドイツと激動の「無秩序時代」を生き抜いた「反抗と抵抗の人」であった、と評する [Schewing, 1963]。K・ゾントハイマーは、O・E・シユデコプフの著書を『フランクフルト・アルゲマイネ・ツァイテウング』紙の中で論評した際に、ニーキッシュを「革命のロマンチスト」と称する。ニーキッシュはヴァイマル共和国を拒絶することに熱心であったことでは、その活動が結果的にはヒトラーの権力就任に間接的に支援したことになる。もちろん、ニーキッシュは直接的にヴァイマル共和国を弱体化させヒトラーへの権力への道を切り拓いたわけではない。むしろ、それに反抗した人物であった。ただ、ニーキッシュは批判、抵抗を行うことはあっても建設的な結果を出せなかった思想家であり、活動家であった。彼はヴァイマル共和国を攻撃することにおいて熱心なあまり、左翼陣営から支持されることはなかっただけではなく、共和国の基盤を掘り崩す役割の一端を担ったことになる。その意味で論じるかぎりにおいては、ニーキッシュは社会保守主義者としてナチズムに抵抗したとはいえず、ヒトラー政権を阻止する勢力の結集には寄与することはなかった。

ニーキッシュのナチスへの抵抗は、自らの論理性からすれば、おそらく正当化できるものであった [Niekisch,

「1901」。ヒトラーの権力への道は、ヴァイマル共和国の失敗によって、ヒトラーとの競争者が権力奪取を意図せず
権力就任への「舗装」した結果になるかもしれない。ニーキツシュの場合で考えれば、共和国とナチズムに極端な
告発を向けた。ニーキツシュは思想・活動の「不満・不平」を機会ごとに自己の思想レベルでは彼自身の「知的資
産」になったとでも、その行動においては決して成果を生じることにはなかった。しかし確かにその意味では、「そ
れにもかかわらずの哲学 (Philosophie des Dennoch)」または「無益な奉仕者 (nutzlosen Dienern) [Buchheim, 1958: 351]」
とだけと評価しうるだろうか。反ナチのレジスタンス運動・思想にスポットライトを照てるだけではない、それ以
上の意義を考える必要があるのではないか。

実際に、ニーキツシュは行動へと人々を動かすことに長けていたとは言えないであろう。「社会保守主義」が民
主主義体制の中で存在できたとしても、結果的に民主的価値への信頼を喪失する機能を果たした。だから、後の視
点からすれば、ニーキツシュはヴァイマル共和国との「闘争」において反ヴァイマルの、単なる「鼓手」以外の何
者でもなかったかもしれない。確かに、ニーキツシュの意図が壮大な計画であったことは確実であろう。彼の「抵
抗思想」は、結論的には、左翼陣営に正式にその一員として認められるかは別にして、「社会主義者」として、中
間層をナシヨナリズムに取り込むための戦略でしかなかった。一見するとナチズムの主張と類似するので、そのち
がいをどこまで人々に理解させることができたかどうか。

新しく急進化した中間層の一部は共産党に参加した。彼らは共産党の強さとその社会意識がナチスと同じ目的の
解決策を称賛し同志を得ることが可能となった。彼の「抵抗思想」や「ポツダム思想」にアピールされる人々は共
産主義 (ボルシェヴィズム) に希望を見出そうとしたかもしれない。ところが、ニーキツシュは、ナチスや共産党
と異なつて、政党政治を拒絶してしまつた。そうすると、どのようにニーキツシュは社会的基礎をもつ運動を形成

することが可能になるのであろうか。そこに政治的現実主義の欠落と組織能力の弱さがなかったのか。『抵抗』サークルの最後の年次集会は二〇〇名が参加した。彼の考える社会主義、「ボツダム思想」、ソ連共産主義はその三位一体化を思想上では構築したことになった。

ニーキッシュのナショナル・ボルシェヴィズムの前提は、階級と民族の平等関係にあって、戦争直後のドイツ革命の経験から、ヴァイマル共和国初期にかけて、二つの洞察を示すことになった。彼は、ドイツ労働者だけでは社会主義ドイツの創造のためには闘うことができない、と考えていた。さらに、バイエルン共和国指導者として、それへの抑圧された政治体験は、ニーキッシュにバイエルン特有の分邦主義、反プロイセン的な社会主義の経験を失敗の原因に結びつけていると考えざるをえなくさせている。ドイツは戦勝国の西側諸国とその従属国の資本主義によって包囲されていた。ドイツでの社会主義の勝利とその維持は、民族的努力でなさなければならず、またはその運動が運命を決定する。ニーキッシュは連合国の資本主義がドイツ労働者への抑圧と一体化していると考えに行き着いたのである。この視点では、ドイツ人すべては、ヴェルサイユ条約と賠償を通じて「鎖」でつながれる賃金奴隷でしかない。それを脱するためには、ドイツ国民はドイツへの抑圧を克服する手段として民族主義的解放を果たさなければならぬ義務がある。ニーキッシュは、最終的には国家の欲求と労働者のそれが一致する、と結論づけた。彼はこの志向変更によって、社会主義者であったとしても、確信的マルクス主義者から出発したとはいえ、すでにそうではなくなっていた。そして、「抵抗思想」は左翼陣営へ向かう中間層のナシヨナリストイックな人々を最後まで魅了できなかった。ナシヨナリズムは中間層の価値体系においては重要であったとしても、それは第一次的な価値観ではなかったのである。そのことをヴァイマル時代末期、そしてヒトラー、ナチズムが政権を奪取することになって、ニーキッシュは初めて学んだようである。ドイツの若者はヒトラーのもとに殺到した。そしてナチ

ス政権による戦時経済体制が開始されていた。ニーキツシュは、一九三〇年から一九三五年の時代まで、ヴェルサイユ条約に対抗する「ドイツの抗議」と「ヒトラーへの拒絶」から抵抗運動の目標を変更することで、理想主義から現実主義の歴史観に移らざるをえなくなった。彼は一九三五年以降、ナショナル・ボルシェヴィズムの過去を語らず、戦術的なレトリックを言及するようになった [Buchheim, 1957: 560]。

若い保守主義者から「タート (Tart)」「サークルやニーキツシュなどまでそれぞれが目指したナショナル・ボルシェヴィズムまでの資本主義と社会主義の中間をいく」「第三の位置」まで広い範囲が存在したけれど、その運動が不信感をもった、二つの敵意を抱かせた。第一はヴァイマル共和国と自由民主主義とみなすものへの敵意であった。その意味は世俗的、合理的、道徳的な伝統である。第二にポスト・ブルジョアジーの秩序を備えた「国民国家」を通じたナショナルリズムの回復のヴィジョンへの敵意であった。ナチスへの共感においては、もちろんニーキツシュにはまったく共通しなかったが、総体的にヴァイマル共和国とヴェルサイユ体制からの解放に向けて政治的エネルギーを注入することには積極的であったことは同じ意識であった [Noaks, 1990: 81]。ところが、回顧的に述べるのは簡単だが、あえて述べるなら、ヴァイマル的なものへの抗議は、ヴァイマル時代の「精神」と「権力」との分裂をさらに悪化させたことも明記しておかなければならない [生松、一九七五・一六六]。

ナチスの国民社会主義は確かにヴァイマル共和国のブルジョアの現象ではなく、ナショナル・ボルシェヴィズムの一部のナショナルな革命運動のなかの、それも本質的な思想の一部では類似性があった、と言える。ニーキツシュは第三帝国時代の前半において、まだナチスの本質がその後期において十分に明らかになる前に、次のようにナチスを予言していた。国民社会主義がブルジョア要素と並んで、非ブルジョア的な「反西洋的」「アジア的」「蛮行的」な要素を含む恐怖心と嫌悪感をもつと糾弾した、と言われる [Buchheim, 1957: 561]。とはいえ、彼の予言はそ

の指摘の「正誤」をとまかくとして、恐怖と嫌悪すべきナチスの時代を迎えることになってしまった。

*E・ニーキッシュ（一八八九—一九六七年）はシュレージンのトレブナツツにおいて労働者の両親に生まれた。一八九二年家族とともにバイエルンのネルトリンゲンに移り、当地の国民小学校、実業・教員学校兼受験学校、アルトドルフの師範学校を卒業後、アウグスブルクの国民小学校教師になった。第一次世界大戦勃発時には小学校教員をしていた。一九一七年一〇月ドイツの敗色が濃厚になった時期に一九一七年一〇月ロシア革命の影響を受け、社民党員になった。一九一八年一月バイエルン革命が勃発し社会主義政権が誕生する。彼はアウグスブルク兵士・労働者協議会（Räte）の指導者に選出された。その後、一九一九年春には革命がさらに急進主義的に発展した際、彼は最も急進的な独立社民党員として、一九一八年から一九一九年前半までバイエルン労働兵レーテ中央協議会議長であった。一九一九年ミュンヘン・レーテ共和国に参加。しかし、バイエルン独特の分邦主義（particularism）とナショナルなドイツの断片化に反対する立場から、議長を作家のE・トラーと交代した。「同革命については古田、一九七八年参照、バイエルン革命後については古田、一九八八年、二〇一三年参照」。しかしその後、独立バイエルン共和国が宣言されたころから、彼は革命政権から離反した。共産主義革命政権が当時の社民党を代表とするホフマン・ラント政権軍に鎮圧された際、逮捕され二年間（一九一九—一九二一年）の懲役刑を受けた。出所後、社民党員に復帰。一九二一年ラント議会議員団長、一九二二年ベルリンにおいて若者の指導役としてドイツ織物労働組合機関紙の主筆となり、一九二三年から二六年まで労働組合書記を務めた。

一九二六年以前、ニーキッシュは他の社会主義者や労働組合専従者の間で抜きん出るほど活躍はない。ただ、彼は、ロシア革命のダイナミズムを賞賛する一方で、社民党への急進性の欠如した姿勢を批判した。ただ、彼はその時点で離党せずその地位に留まった。一九二六年に自らの雑誌『抵抗』を創刊。一九二六年から一九二八年『民族国家』を刊行。一九二九年ベルリンに『抵抗』の拠点を移し雑誌発刊を継続した。ヴァイマル中期から一九三三年ヒトラー政権までのニーキッシュの活動は本論を参照。ヒトラー政権時代の一九三七年ニーキッシュはゲシュタポに逮捕され、一九三九年民族裁判所から反逆罪で終身刑を受けたが、第二次世界大戦末期に赤軍によって解放された。第二次世界大戦後、一九四六年社会主義統一党（SED）に参加、一九四五年から一九四八年にかけてヴェイルヘルムマードルク市民大学教授、一時東ベルリンのフンボルト大学において教鞭をとった。第二次世界大戦後に執筆活動を再開して、『ドイツの存在過誤（Deutsche Daseinsverfehlung）』『抑圧の悪魔帝国（Das Reich der niederen

Daumenen]『危険な生活 (Gewagtes Leben)』『政治論文集 (Politische Schriften)』などを発表した。一九五三年六月反乱を指揮した嫌疑に対して批判し、SEDを離党し、西ベルリンに移住。その後西ベルリンの自宅に引退。一九六七年五月二三日に死去 [Nikisch, 1958: 11-169; Nikisch, 1965; Schinddekopf, 1960: 510; Hafler, 2008: 283-293; Sauter, 2002: 313-314]。

注

- (1) 第二次世界大戦後、社民党指導者となるK・シューマツハーは当時の若い活動家のひとりであった。
- (2) この方針が戦術以上となり、共産主義サークル内で受け入れられ、共和国末期の政治状況を評価する際には重大な誤りを導くことになる。もっとも、ニーキツシュは社民党幹部への批判を強めている。彼は、「西側資本主義国」による排除されたドイツの「プロレタリア化」に抵抗する「革命的人民 (revolutionary people)」を高く評価していた。それはナショナリストへの煽動そのものである。このことは二つの抵抗を示している。それらは「プロレタリア化への抵抗」と「戦勝国からのドイツ搾取への抵抗」である。この時機以降、彼は「抵抗思想」の看板を掲げることになる。ニーキツシュ自らは「ナショナル・ボルシェヴィズム」を理論化し、その実行用のプロバガンダを中核となすようにした。
- (3) 賠償不履行に関するフランス軍によるルール占領に炭鉱労働者がサボタージュを行って抵抗した。その労働者のひとりA・L・シュラーゲターがフランス軍に射殺された事件があった。この犠牲者を賛美し自党の宣伝に利用する動きが共産党とナチスにもそれがあつた。
- (4) ドーズ案とそのため国内外の賠償交渉については、有澤、上巻、一九九四年第一章を参照。
- (5) 同協定では、イギリスはドイツ東部の領土保障には無関心であつたので、ロカルノ条約をヨーロッパ全体の安全保障問題に関しては不完全な解決策とした。この不完全さ・不適切さは後年、ヒトラー支配下のナチス・ドイツが東部戦線で第二次世界大戦を開始したときに、それが不完全であつたことが証明された。
- (6) レヴェントロウ伯は右翼団体の全ドイツ連盟のメンバーとして出発しながら、一九二〇年代後半までにゲルマン的キリスト教を宣伝する方向に転換し、最後はナチス黨員で政治生活を終了した。
- (7) ドレスデンでは、一九二六年以来、彼のナシヨナリスティックな思想に基づいて社民党内右派小グループを中心としてサクセン社民党の古い体質を改めようとしたが失敗した。その原因で彼は一九二六年に社民党を離党し、ベルリンに移動す

を「つづなごった [Schüddenkopf, 1960: 511]」。

- (8) ニーキッシュはマキャベリの思想を称賛している。彼の抵抗出版社はマキャベリの著作を出版している。
- (9) ユンガーは、強い国家は社会的、民族的な次元が相互に絡み合なければならないので、労働が労働者に結びつかないなら存立できないという主旨の論考を寄稿した。この考え方を後年に発展させている。
- (10) これには好意的な反応があった。また、ニーキッシュは軍中樞のゼークト将軍にも東方志向の必要性に関する外交政策を提案する手紙を出している。
- (11) 『決定』は一九三二年一月九日に発刊された。一九三三年一月三〇日ベルリン警察長官の命令で廃刊に追い込まれた。

欧語文献

- Buchheim, H., Ernst Nieksichs Ideologi des Widerstand, *Viertel für Zeitgeschichte*, V, 1957.
- Bullock, A., National Bolshevism, Bullock, A. and Stralbybrass, O. (eds), *The Fontana Dictionary of Modern Thought*, London, 1977
- Evans, R. J., *The Coming of the Third Reich*, N. Y., 2004.
- Gleason, A., *Totalitarianism. The Inner History of the Cold War*, Oxford, 1965.
- Haffner, S. Venohr, W., *Preussische Profile : Porträts von 12 herausragenden Preußen von Friedrich Wilhelm I. Über Otto von Bismarck und Friedrich Engels bis hin zu Ernst Nieksich*, Ullstein Taschenbuchverlag, 2001.
- Haffner, S., Ernst Nieksich, Haffner, Venohr, 2001.
- Jürgen, F. G., Fröschle, U., Haase, V. (Hrsg), *Immitten dieser Zerstörung : Briefwechsel mit Rudolf Schlichter, Ernst Nieksich und Gerhard Nebel*, Kielt-Cotta Verlag, 2001.
- Heberle, R., *Landbevölkerung und Nationalismus : Eine soziologische Untersuchung der politische Willensbildung in Schleswig-Holstein 1918 bis 1932*, Stuttgart, 1963 (中道寿一訳『民主主義からナチズムへ——ナチズムの地域研究』御茶ノ水書房、一九八〇年)。
- Heidegger, H., *Die deutsche Sozialdemokratie und der nationale Staat, 1870-1920*, Göttingen, 1956.
- Holborn, H., *Political Collapse of Europe*, N.Y., 1957.

- Kabernan, F., *Widerstand und Entstehung eines deutschen Revolutionärs : Leben und Denken von Ernst Nieckisch*, Bublises Siestried, 1990.
- Kaufmann, W., *Monarchism in the Weimar Republic*, N. Y., 1973.
- Lebovics, H., *Social Conservatism and the Middle Classes in Germany, 1914-1933*, Princeton, 1969.
- Lebovics, H., An Introduction to the Mittelstand, Lebovics, 1969.
- Lebovics, H., The Use of Social Conservatism : Ernst Nieckisch Confronts Nationalism : Oswald Spengler Discovers Socialism, Lebovics, 1969.
- Nieckisch, E., *Gewagtes Leben : Begegnungen und Begebnisse*, Köln, 1958.
- Nieckisch, E., *Die Legende von der Weimarer Republik*, Köln, 1965.
- Nieckisch, E., Widerstand : Aufsätze aus *Widerstand-Blätter für sozialistische und nationalrevolutionäre Politik*, Sinus Vlg, 1982.
- Nieckisch, E., Hitler, ein deutsches Vernachlässigt, Bublises Siestried, Nachdruck der Ausgabe, 1932, 1990.
- Noakes, J., German Conservatives and the Third Reich : an ambiguous relationships, Blinkhorn, M. (ed), *Fascist and Conservatives. The radical right and the establishment in twentieth-century Europe*, Routledge, 1990.
- Pulzer, P. G. J., *The Rise of Political Anti-Semitism in Germany and Austria*, John Wiley & Sons, Inc., N.Y., 1964.
- Rätsch-Langejürgen, *Das Prinzip Widerstand! Leben und Wirken von Ernst Nieckisch*, Bouvier Verlag, 2000.
- Sautter, O., *Biographisches Lexikon zur deutschen Geschichte*, C. H. Beck, 2002.
- Scheuring, B., *Ernst Nieckisch und die Legende von der Weimarer Republik*, Nieckisch, 1965.
- Schlüdekopf, O-E., *Linke Leute von Rechte : Die nationalrevolutionären Minderheiten und der Kommunismus in der Weimarer Republik*, Stuttgart, 1960.
- Schlüdekopf, O-E., *Nationalsozialismus in Deutschland 1918-1933*, Frankfurt/M, 1970.
- Stern, F., *The Politics of Cultural Despair : A Study in the Rise of the Germanic Ideology*, Berkeley, 1961.
- Struve, W., *Elites against Democracy . Leadership ideals in bourgeois political thought in Germany, 1890-1933*, N.Y., 1973.
- Sutton, A. C., *Wall Street and the Rise of Hitler. The astonishing true story of the American financiers who bankrolled the Nazis*,

Clairview, 2010.

Watie, R. G. L., *Vanguard of Nazism : The Free Corps Movement in Postwar Germany, 1918-1923*, Cambridge, 1952.

邦語文献

有澤廣己『ワイマール共和国物語 上下巻』東京大学出版会、一九九四年

生松敬三『人間への問いと現代 ナチズム前夜の思想史』NHKブックス、一九七五年

古田雅雄「アイスマー政権の挫折—バイエルン革命におけるアイスマー政権の紹介—」『関西大学法学会誌』第三三巻、一九七八年

古田雅雄『秩序細胞』政策とは何か—バイエルン人民党政治—一九二〇年—一九三三年—『六甲台論集』第三五巻第二号、一九八八年

古田雅雄「バイエルンにおける政治的カトリズムの研究—一九世紀国民国家形成期における『国家と宗教』の関係から—」『社会科学雑誌』第七巻、二〇一三年

脇 圭平『知識人と政治』岩波新書、一九七二年

八田恭昌『ヴァイマルの反逆者たち』世界思想社、一九八一年